米欧亜回覧

第６４号
発行
特定非営利活動法人
米欧亜回覧の会
編集委員会

岩倉使節団は明治国家に何をもたらしたか？

～会員有志のパネルデスカッション

十一月五日(土)全体例会で

秋の全体例会は、十一月五日（土）の午後、国際文化会館の講堂で行われることになった。一部は恒例の会務報告、二部は歴史部会担当で「岩倉使節団は明治国家に何をもたらしたか」というテーマで会員有志のパネルデスカッションを軸に会員参加の研究集会という趣向で行うことになった。

今年の歴史部会は年初より明治初年の人物を中心に会員の研究発表が続いているが、それを基に岩倉使節団の歴史的意味について考えてみようという試みである。岩倉使節団から四名、留守政府から二名、計六名のリーダーを選び、それぞれの角度から評価する。とくに留守政府側からも見てみようというところに特長がある。

人物別の発表者は、次の通り…岩倉具視＝山田哲司、木戸孝允＝芳野健二、大久保利通＝大平忠、伊藤博文＝永富邦雄、西郷隆盛＝小野寺満憲、大隈重信＝小野博正の各氏で、コーディネイターは泉三郎氏である。

全員参加型の会にしたいので、是非参加してほしい。そして、関心のある知人、友人など誘っていただければ幸いである。

中村敦夫氏の講演「簡素なる国へ」、七月の全体例会、熱気こもる！

夏の全体例会は、七月二十三日（土）、日本プレスセンター九階の宴会場で行われた。

（詳細は二・三頁）

なお、二次会は隣接の富国生命ビルにある聘珍樓で行われ、中村氏を囲んでなごやかに行われた。そこでは細川新党時代のこと、俳優時代の秘話、テレビキャスター時代の話など、いろいろの話題が出て興味津々、時間の過ぎるのを忘れるくらいだった。堅い話もいいが、やはり酒食の間での柔らかい話もまたいいもので、当会の特徴はその両面をもっていることであろうか。ゲストにも感謝したい。

当会設立十五周年記念「小論集」について

四月総会および六月の論文募集の呼びかけに応じた会員の新規論文がすでに編集委員に届きはじめ、現在執筆中の会員も多い。これらの論文は、当会ホームページの「会員のページ」内の「特別寄稿」ページに、従来の会員による寄稿に追加掲載している。

また、「特別寄稿」欄を当会のデジタル・アーカイブとして活用する試みも同時に進行し、冊子にまとめられている国内外の旅行の文集や資料などがデータ化され、掲載が始まっている。

（詳細は三頁）

全体例会（7月23日・日本プレスセンター）

天空の妖精と地上のドジョウ

泉 三郎

九月十八日の夜、ＮＨＫスペシャルの「宇宙の渚」を見た。宇宙ステーションからの生中継で、世界初という素晴らしい映像が映し出された。九十分で地球を一巡り、日の出、月の入り、そして夜景の鮮明な画像がとくに印象的だった。もう五十年も前、宇宙船からの映像「青い地球」を見たときと同様の凄い感動を覚えた。科学技術がここまで進歩したか、居ながらにして地球を俯瞰する思いだった。そして「オーロラ」、「流星」、「謎の光・スプライト」が映し出された。とりわけ驚いたのは「スプライト」で「天空の妖精」と訳され、雷雲の上に放射される「妖精」のような光だった。そこに宇宙の不可思議を感じるとともに、日本の科学技術の素晴らしさをあらためて知り誇りに思った。そして人工衛星や宇宙技術のお陰で、我々は日常的に放送や電話やＧＰＳなど極めて便利な暮らしを享受出来ていることを思った。

かつて久米邦武はパリの天文台を見て宇宙研究の重要性を説いたし、福沢諭吉は科学技術の進歩に無限の可能性を夢想した。科学技術はその期待に充分に応えて来たといえる。

しかし、地上で人間のやっていることはどうか。とりわけ人間くさい政治の世界は相も変わらずという感じである。地球のあちこちで流血の争いが続き、日本ではドジョウ内閣が泥田でうごめいているようだ。人間そのものの営み、利害の衝突は、千年前も百年前も余り変わらないようにみえる。むろん、人間社会も少しは進歩した。かつてのような奴隷制はなくなり独裁政治も少なくなった。飢餓で死ぬ人も恐慌で路頭に迷う人も少なくなった。社会科学の知恵もそれなりに進歩したといえる。しかし、科学技術の進歩に比べれば格段に劣り、その進歩は遅々としている。

天空の妖精と地上のドジョウ、進歩と停滞、向上と頽廃、文明と野蛮、その落差の激しさはどうだろう、いまこそ人間そのものの質的向上、久米のいう「道義」、福澤のいう「品性の高尚」が切実に求められる時だと思う。

第60回 全体例会

中村敦夫氏をゲストに講演とディスカッション
「簡素なる国へ、政治をどう変えるか」

グローバルジャパン研究会担当

第六十回全体例会は七月二十三日（土）、日本プレスセンター九階宴会場において開催された。出席者は約四十名。

十三時三十分より始められた全体例会第一部では、まず泉理事長から現況報告をかねた挨拶があり、つづいて石垣事務局長から会務報告、各部会幹事から活動状況について簡潔な報告が行われた。

小休憩の後、石垣グローバルジャパン研究会幹事の司会・進行によって第二部の講演とディスカッション「簡素なる国へ、政治をどう変えるか」が中村敦夫氏をゲストに行われた。氏は俳優、キャスター、政治家と多才なご経歴の上に、現在は日本ペンクラブ理事兼環境委員長として活躍中の著名人だが、実は平成十年十月に米欧亜回覧の会でもご講演をいただいたご縁がある。今回は、中村敦夫氏の最新の著作「簡素なる国」を読み、是非ともお招きして会員の皆様とも「国と政治の行方」についてのディスカッションをしたいと云う願いが実現した。

講師の中村敦夫氏

多様な体験を基に纏められたメッセージ「日本人よ！今こそ強欲から『小欲知足』へ、震災と原発事故の後を考える」は、絶妙の話術と共に説得力あふれるもので、多くの参加者の共感を呼んだ。講演後のディスカッションは、「小欲知足」をいかに若い世代や価値観を共有しない外国人に説得するかを中心に大いに議論が盛り上がった。中村氏には終了後の有志による懇親会までご参加をいただき、厚くお礼を申し上げると共に、益々のご活躍を祈念したい。

◇講演要旨

泉理事長からのユーモアに溢れる講師の紹介の後、今は「戦場の散歩」という現世への衝撃的な感想から中村敦夫氏の講演が始まった。永年の様々な体験・経験から来る氏の歴史観は、学問上の整理は難しい立体的なもので、今は「近代の終焉に向かっている」との認識を示された。具体的には出口のない「四つの壁」に人類は閉じ込められている。その壁とは、（一）核兵器・原発、（二）環境破壊、（三）人口爆発、（四）経済（資本主義・マネーゲーム）で、これらの壁が出来た背景や理由は以下のとおりである。

人類は資源・石油戦争からいまだに抜け出せていない。アメリカは湾岸戦争の前から、カリフォルニアの砂漠で将来起こるであろう中近東での戦争の訓練と準備をしていた。戦争は経済成長のカンフル剤ではあるが、死の商人は通常兵器だけではなく、核兵器・原子力までもビジネスにしてしまった。アメリカの巨大化は戦争によってもたらされ、「マニフェスト・デスティニー」（領土拡大は神の明白な天命とする思想）は、アメリカ建国の根拠でもある。今や核爆弾は世界中に二万個に達し、さらに、プルトニウムは核爆弾そのものである。

経済成長と技術信仰の結果、自然は破壊され人類そのものが絶滅危惧種になってしまった。限られた自然資源である「大気と水と土」をどうするか。温暖化の影響で先ず農業がダメになる。そして食糧がなくなる。さらに水不足をどうするのか。有毒化学物質を含むゴミをどう処理するのか。自然との共生が不可欠であり、人類が生き続けるためには第一次産業の重要性をもっと見直すべきである。

経済成長の実態とは、グローバル企業が安い労働力を求め世界中に貧困を作り出すことであった。一八二〇年代のオックスフォード大学のミルまで経済学はなかった。さらにケインズは悪徳の受容まで経済理論に持ち込んだ。その後は周知のとおり、実物経済から金融工学（マネーゲームの理論化）、八百長経済へと変貌し、ついに国家による「自爆テロ」の様相となった。さらに政治的には中央集権から官僚指導となり、「隠す」「嘘をつく」「シラバくれる」と云う原子力行政に代表されるような体質が出来上がった。

◇Q&A

会場から「このままでは人類は壁の中に閉じ込められて絶望するしかない、いかに脱出するかを早く教えて欲しい」との多数の意見あり。四つの壁からの脱出方法から、後半が始まった。

中村敦夫氏の答えは、「哲学の出番」であった。つまり、「大事なものを変える」「価値観を変える」しか方法はなく、一言でいえば『小欲知足』の哲学を普及させるしかないとの結論である。

氏の依拠するのはドイツ生れで後に英国に帰化した経済学者シューマッハであり、彼の有名なスローガン「スモール　イズ　ビューティフル」が壁脱出のキーワードとなる。一九六〇年代半ばに資本主義はピークを超え、七十年代からは例えばベトナム戦争、中近東戦争、リーマンショックなどの大きな歪みを起こしている現代社会の中で、シューマッハの主張は、「自然の中にある資源は全て人類の資産だ」「再利用可能なエネルギー以外は負債だ」と云う強烈な資源に関する経済認識にある。

中村敦夫氏の対応策は、インド経済発展の基本思想を作ったガンジーの「仕事をたくさん作る事が重要」と云う仏教経済学にも近い。

「日本の電力は足りている。」「中間技術、人間の手足を使おう。」「大都市、大企業、大国はムダと非人間的な社会の源泉」「第一次産業こそ最重要産業」「都市も四十万人が限界」「ローカルの重要性に目覚めよ、鎖国的な

考えも必要、地域政党の出番」、などの考え方が具体的な事例と共に語られ参加者の共感を得た。

◇ディスカッション

続いて、多くの会員から建設的な意見が出されたが、最も大きなテーマは、「苦も楽も体感した日本のシニア世代には『小欲知足』は解決策として良く理解できるが、若い世代や外国人をどのように説得できるか」であった。氏もある高僧に相談したところ、「私も苦労している、取り敢えず『中欲知足』から始めるか」と答えが返ってきたとの話も披露された。

神を人間の上位に置き、ともすると自然を人間の下位に置くキリスト教と、神、人間、動物、植物までもが同列にならぶ仏教の考え方の違いが、受け入れる人間の素地（ベース）の違いを作っている事は確かではあるが、「スモール　イズ　ビューティフル」の好事例を沢山作り、それを皆に見せて納得させる説で、例えば地方や小企業でのローカル且つ「小欲知足」の具体的な成功例を数多く見せる事である。「嬉しい事に、今ではいくつかの地方自治体やNPOには、このような萌芽が現われている」との中村氏の言葉に希望を繋ぎ今回の研究会を締め括った。

（文責）石垣　禎信
（写真）橋本　吉信

講演会場（日本プレスセンター宴会場）

米欧亜回覧の会　十五周年の記念小論文集について

前号でご案内の通り、当会の十五周年記念事業として、『小論集』刊行の企画が進行している。現在までの進行状況を報告する。

会員に呼びかけて以来、幾つかの論文が寄せられ始めたが、現在までに集まった論文は、とりあえず、当会のホームページ上の、会員のページ「特別寄稿」欄に、会員がいつでも見られるように、アーカイブとして掲載を始めた。しかし、掲載論文が増えるに従い、ホームページの容量が残り少なくなっていることが判明した。そこで、暫くの間、掲載を中断していたが、九月末に、容量を倍増する契約変更を行い、掲載を再開している。

すでに掲載されている小論文と過去に当会が開催した国内外旅行の文集などの一覧表を別掲するので、是非、一度ホームページを覗いて検索し、興味ある論文に目を通して頂ければ幸いである。

今後の予定は、まず、来年三月ごろまで、皆様から寄せられた論文集のアーカイブをホームページ上に充実させる。したがって、これからも自薦・他薦を問わずお寄せ戴きたい。

次の編集委員会で編集方針を検討し、ホームページに掲載されたアーカイブ論文の中から、刊行小論文集を検討したいと考えている。

現在のところ、コストとの相談で、どんな様式の刊行になるかは未定である。出版社が刊行を考えて頂ける内容次第で出版社に依頼することも考えられるし、場合によっては、簡易な製本の会員向けの本となる可能性もある。その出版体裁については、予め決めずに、今後の検討課題とし、ご理解を得たいと考えている。

投稿戴いた皆様のご意見も参考にさせて戴きながら、この事業を推進していく所存である。

〔ホームページ掲載論文〕

小論集原稿を含む当会のアーカイブは、ホームページ内の会員のページ「特別寄稿」欄に掲載している。以下は、十月一日時点での掲載のタイトル・リストである。

〈会員による研究資料〉

▽「大久保利通に学ぶ」（大平忠）
▽「資料研究:CharlesLanman著“The Japanese in America”(1872)　初版原稿」（鵜飼直哉）
▽「蓮舟田邊太一のつぶやき（一）～翁の著書「幕末外交談」から～」（田邊康雄）
▽「十九世紀米欧高等教育モデルと日本モデル形成」（大森東亜）
▽「高橋是清とチャールズ・ウォルコット・ブルークス」（三原浩）
▽「西洋農学の導入を巡って」（小林富士雄）
▽「国会図書館版の実記について（一）」（鵜飼直哉）
▽「君が代の歴史　―音楽の歴史―」（永富邦雄）
▽「岩倉使節団と日本林政」（小林富士雄）
▽「アヴァ号の事など」（三原浩）
▽「第九十八巻ベンガル湾の旅」（桑名正行）

このほか、グローバルジャパン研究会の記録冊子などの掲載準備が進行している。

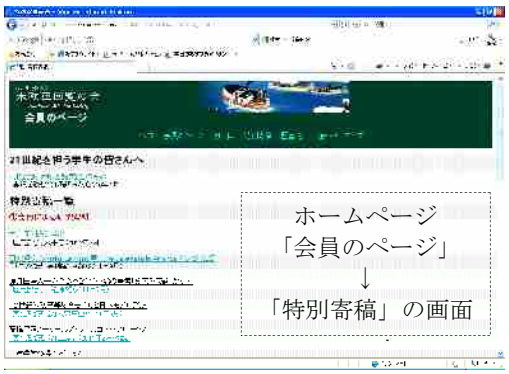
〈岩倉使節団の足跡を追う旅の記録〉

▽「上海での岩倉使節団の足跡を追って」（三原浩）
▽「セメリング鉄道の巻」（鵜飼直哉）
▽「実記を片手にリギ山へ」（鵜飼直哉）
▽「久米邦武追っかけの旅（サンフランシスコ）」（鵜飼直哉）
▽「久米邦武追っかけの旅（ヴェネチア）」（鵜飼直哉）

〈米欧亜回覧の会・旅行文集〉

▽「中国旅行記念文集」中国・上海万博の旅（二〇一〇年六月）
▽「薩摩の旅記念文集」薩摩の旅（二〇〇六年五月）
▽「松前の桜と北海道の旅記念文集」松前、北海道の旅（二〇〇四年五月）

以上



ホームページ
「会員のページ」
↓
「特別寄稿」の画面

会員有志のパネルディスカッション
「岩倉、木戸、大久保、伊藤、西郷、大隈を六人の論者がどう評価するか？」

泉　三郎

三．一一の歴史的大災害を契機として、今年は「日本の近代」を見直す気運がとくに高まっている。それは日本だけではない、グローバリゼイションの名で世界中を席巻している近代文明、言い換えれば科学技術文明、工業文明、資本主義文明、さらにいえば資源収奪文明、環境破壊文明を見直す気運といってもいいだろう。

折しも今年から再来年にかけては、岩倉使節団の派遣からちょうど百四十年目になる。それはまた日本の近代化のプロセスと重なっており、その起点となった岩倉使節団をあらためて見直すべき時だと思う。

そんな背景もあって、歴史部会では年初から日本の近代史を学び直そうと、岩倉使節団にまつわる人物を中心に研究会を重ねている。すでに木戸孝允、西郷隆盛、大久保利通、山県有朋、伊藤博文が採り上げられ、岩倉具視、大隈重信と続いている。そこで、石垣事務局長の発案もあり、十一月の全体例会では「岩倉使節団は明治国家に何をもたらしたのか」について、会員同志でのパネルデスカッションを行い、全会員にも呼びかけて意見交換をしようということになった。

人物としては岩倉使節団から四名そして留守政府から二名を選び、それぞれの担当を小野博正氏と相談し、依頼した。使節団側からだけでなく留守政府側からも見ていこうというのが趣旨である。

当会は、これまで「米欧回覧実記」についてはかなりの研究をしてきた。しかし、岩倉使節団の歴史的な意味については会員間で研究会を催すことはなかった。もっとも、設立五周年記念シンポジウムを行った際に、外部講師を招いて研究会を行い、「岩倉使節団の再発見」の書名で報告書も出版している。

しかし、今回は会員の六名が、それぞれの立場から意見を述べる形式であり、新しい知見が開かれることを期待したい。テーマを「明治国家」に絞っているが、それは当然その後の日本につながり、短い時間ではあるが、多くの会員の参加を得て、刺激的で実り多い時間になれば幸いである。

「アメリカ西部開拓史映画の鑑賞と納涼の集い」
―実記を読む会特別企画

橋本　吉信

六月の「実記を読む会」で、第六章「ネヴァダとユタ」第七章「ロッキー鉄道」の報告を行なった。（六頁に掲載）ついでに、アメリカの「フロンティア開拓」の歴史を知る上で評価の高い名作映画「幌馬車」と「アイアン・ホース」があるなら、それを鑑賞し、ワイガヤ的に「納涼懇親会」を、とのアイディアが持ち上がり、早速、実行に移すことになった。

そこでまず、小坂田氏がDVDを調達、場所を橋本が確保し、七月十三日（水）～十四日（木）に開催が決まった。会場はJR青梅線御岳に近い「奥多摩園」。ここはブリヂストンの創業者・石橋正二郎氏の旧別荘で、約一万坪の敷地は秩父多摩甲斐国立公園の一角で、奥多摩の清流を前にして庭園と宿泊施設があり、社員・家族の研修・保養のために利用されている。

そこで「歴史部会」と「英訳実記を読む会」にも呼びかけ、十七名（男性九名、女性八名／夫妻二組）が参加することになった。

五十インチTVで、最初に映画「幌馬車」を鑑賞した。一八四八年にカンザスとミズーリから遠くオレゴンの新天地を目指し旅立った幌馬車隊が、多くの困難を乗り越えてカリフォルニアに到達し、ゴールドラッシュで富を築くまでを描いた、一九二三年ジェーム・クルーズ監督の作品である。

終了後、夏の陽射しが和らいだ庭園を散策した。鬱葱と茂る渓流沿いの小径を登ると、落差約十五メートルの「清流の滝」に辿りついた。

石橋氏は戦後のモータリゼーションに対応するために、量産タイヤの新工場と研究センターをここで構想したと伝えられる。

食堂からは、奥多摩の山並みが夕陽に輝いていた。泉代表の音頭で乾杯。海鮮料理を賞味しながら、各人から近況が語られ、賑やかな納涼のひと時であった。

夕食後二回目の映画、一九二四年ジョン・フォード監督作品「アイアン・ホース」を上映した。アメリカ大陸を東西に結ぶ「大陸横断鉄道建設」の大事業を、大胆な行動と愛とユーモアをとり交ぜて描いた作品で、「幌馬車」に刺激された二十九歳の若き監督の出世作である。両作品とも二時間余のモノクロ、日本語字幕、淀川長治氏の名解説が付いている

その後、二十二時から和室に集って、待望の「ワイガヤ懇親会」が行われた。皆さんタフで、深夜まで談論風発は続いた。庵原さんご寄贈のシャンパンで乾杯！塚本さんと仲津さんは共に映画評論の世界でご活躍中で、映画にまつわる夫々の感想と意見に、独自の視点からコメントも加えられ、当会の多士済々ぶりを感じる会であった。

完成一年半後に大陸横断鉄道を利用した岩倉使節団のこと、そして、原住民、合衆国の統合、西部開拓のこと、さらには日本の政治と将来まで、酒を酌み交わしながら、語り尽くす一夜となった。

翌日は、三々五々、御岳山や渓流、蕎麦など、奥多摩の緑と食を楽しんだ。

ＤＶＤ映画を鑑賞（奥多摩園・川の家ホール）

寄稿

チャールズ・ランマン著「The Japanese in America」と「岩倉公一行訪米始末書」について

鵜飼　直哉

「実記を読む会」で「サンフランシスコ」を読み直したことがきっかけとなって、今年の三月、チャールズ・ランマン著「The Japanese in America」と題する本をアメリカから入手した。発行日は二〇一一年二月二十二日になっているから、まさに出来立てのホヤホヤだ。この新版はランマンの（一八七二年）の忠実な復刻版で、原著は鮮やかな赤い表紙に金色で「米国在留日本人」と書いてある。

一八七二年末、使節団はやっとロンドンからパリに移動して視察の最中である。一八七八年の久米邦武編「米欧回覧実記」が起点と思い込んでいた私には、それ以前に使節団に関する書物がある事が驚きだ。その上、この本はこれまでに発表された数多くの実記研究第一人者の書かれた論文などにはほとんど引用されていないようだ。

（右図）
「岩倉公一行訪米始末書」表紙
安達謙蔵・筆
（灰色の用紙に白抜きの文）

インターネットで調べると、この本は岡村喜之篇「岩倉公一行訪米始末書」という題名で、一九三一年、日本で発行されたことも判った。この発行にともない、英文タイトルを「Leaders of the Meiji Restoration in America」に改めている。更に「検索」を武器に調べてみたら、次々に新事実が明らかになってくる。ここでは以下、「米国在留日本人」と「岩倉公一行訪米始末書」の概要をご紹介する。

（一）チャールズ・ランマン著「米国在留日本人」（一八七二年）

駐米少弁務使・森有禮（二十三歳）は米下院図書館の館長を勤めたランマン（五十二歳）に「Life and Resources in America」という全二百七十頁の大論文（本書の第三章に収録）を書かせ、使節団の出発に間に合わせるべく、一八七一年、日本に送り届ける。その後ランマンは一八七一年九月から一八七二年八月まで森の私設秘書として雇われ本書の執筆に当たる。

第一章　岩倉使節団の記録

冒頭、「一八七二年一月十二日、ワシントン駐在の森有禮はハミルトン国務長官宛に次の書簡を送った」として使節団がワシントンに近日中に来ることを伝えた書簡を示している。

以下、最初の三十三頁は一行の滞米期間中の主な公式行事に於けるアメリカ側と日本側との発言とそれを伝える現地の新聞記事の記録である。

たとえば一月二十二日の記録は、岩倉具視が日本語で挨拶したのに続き、伊藤博文の「日の丸演説」全文が「耳を劈くような拍手と歓声で何回も中断した」という説明付きで載っている。続いて駐日米国大使デ・ロングのスピーチがあり、どの新聞も一行に対する大歓迎の記事で一杯だが、その中で地元紙のものを紹介している。

一行がサンフランシスコからワシントンに向けて出発して以降も同じような調子である。

第一章の最後の十頁を、この使節団が津田梅等若い女性たちを伴ってきた背景説明に当てている。（デ・ロング夫人が五人の日本人女子留学生の世話役となってサンフランシスコに到着するが、以後森有禮がいわば身元引受人となったことから、五人はランマンの家にホームステイする。中でも津田梅は以後十一年間をランマンの妻アデリンを慕って過ごす。ランマンの津田梅に対する第一印象の記録として読むと面白い）

第二章　日本人留学生八人に書かせた小論文十四編

第三章　Life and Resources of America

（二）チャールズ・ランマン著　岡村喜之編「岩倉公一行訪米始末記」（一九三一年）

実は、本書のタイトルを見たとき、日本語版の出版であると思いこんでいた。実際には原文のままであった。本文は「米国在留日本人」と全く同じである。

岡村喜之の序文の冒頭部分が面白い。

「一九二八年の秋のある日、パサディナの古書店で顔なじみの店主と雑談をしていたおり、そばの書棚にあった赤い表紙の本が目に入った。表紙の「米国在留日本人」というタイトルに引かれて七十五セントで購入した。帰宅して本を開いてみた。今までにこれほど読者の関心を呼び起こし、歴史的価値に満ちた本があっただろうか？」、この話は芳賀徹先生と米欧回覧実記との出会いの話（一九九〇年一月十一日ＮＨＫ市民大学で放映）を思い出させる。

巻末に四十頁もの注記がある。その大部分が日本人や日本の制度に関するものであるのはやむを得ない。引用に使った文献のリストがきちんと出ている事は留意に充分値する。

編集の岡村喜之についてはよく判らないが、日米関係が一触即発状態であった一九三〇年にこの本を英文のまま日本で発行した勇気に感動する。

（三）「The Japanese in America」の謎

インターネットで調べてゆくと、次々に新発見があり、そのたびに新たな疑問が出る。

☆なぜ森有禮はこの本の出版を急いだか？

☆この本の著述に森有禮はどのように関与したか?

☆なぜ日本語版は出版されなかったか？

☆なぜ「岩倉公一行訪米始末書」は無視されたか？

☆米欧回覧実記に森有禮が登場しないのは？

☆久米邦武は「The Japanese in America」を知っていたか？

以上、いわばさわりの部分をご紹介した。全十六頁のこの報告は会のウエブサイトに近日中に掲載予定である。

実記を読む会報告

担当幹事　桑名 正行
Tel&Fax 03-3642-9570
mkuwana@nifty.com

■第百五十二回

六月九日開催、出席者九名。第六巻ネヴァダとユタの記　および第七巻ロッキー鉄道の旅。

一．旅程

使節団は旧暦十二月二十二日にカリフォルニアを発ち、雪のシエラ・ネヴァダ山脈の絶壁を穿った分水嶺の高地をラッセル車で走り抜けた。セントラル・パシフィック鉄道（ＣＰ）の終点、ユタ準州のオグデンに到着したのは二十六日、四日間の旅であった。機関車の煤煙、振動、寒さは如何ばかりであったかと想像する。

ロッキー山脈が大雪で鉄道が不通となり、開通するまで、十四日間を南のソルトレイク・シティに滞在して過すことになった。

オグデン駅をようやく一月十四日に出発した。山中の大高原・エヴァンストン駅では積雪のため車中泊をし、最高地点の海抜二千七百四十六ｍ・シャーマン・サミットから三百二十ｍの終着駅オマハに到着。

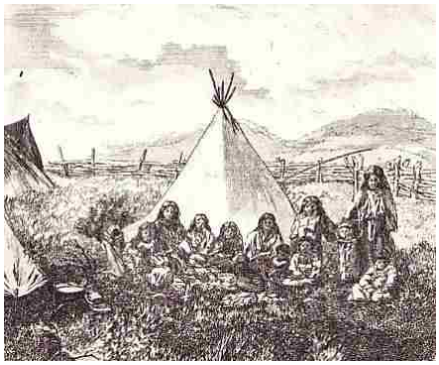
二．大陸横断鉄道の敷設

一八六二年、リンカーン大統領は「太平洋鉄道法」に署名、大陸横断鉄道の建設を推進し、国策会社としてＣＰ鉄道とＵＰ鉄道を設立。二大山脈、大平原、峡谷を乗り越えて二千八百㎞に及ぶ敷設競争が行われ、多くの移民労働力、ニトロ爆薬、電信、測量等多様な技術で難工事に挑んだ。（参考映画「アイアン・ホース」）

六年後の一八六九年、両鉄道の接続地点ユタ準州プロモントリー・サミットで開通記念式が行なわれ、Golden Spike が打ち込まれた。使節団訪米の僅か二年余前であった。

三．インディアン戦争

インディアンは領地を没収され、「保留地」に強制移住させられ、食糧源であったバッファロー（バイソン）は駆除された。彼らは鉄道の建設を白人による侵略ととらえ、建設労働者を攻撃した。


ハンボルト荒野のインディアン（『実記』）

部族は領地を割譲し、僅かな年金と引き換えに、実行性の低い条約を結ばされた。土地取引の知識も乏しかった。米独立戦争以降、西部のフロンティア開拓を目指す入植者が増加し、戦いは大規模化した。（参考映画「幌馬車」）

四．イロコイ連邦とアメリカ連邦政府

オンタリオ湖の南岸とカナダにかけて保留地を領有する六つの部族で構成する「部族国家集団」がある。

一七九四年に米合衆国連邦政府と「平和友好条約」を結び、合議制による自治独立を実現している稀なインディアン部族であり、米政府が条約で保障する「保留地」の本来の姿を維持している。米合衆国連邦制度と憲法制定にも関与し示唆を与えたとされ、研究者の注目を集めている。

今回の報告の作業を通じて、アメリカの領土拡張　政策、原住民族、宗教、西部劇映画について　新たな視点と関心を持った。

（文責）橋本 吉信

■第百五十三回

九月十五日開催、出席者八名。第十二巻華盛頓府ノ記中、第十三巻華盛頓府ノ記

前巻の第十一巻では、大統領謁見から華々しく始まるが、委任状問題で大久保、伊藤が日本に戻ってしまう。そのためワシントン滞在が延び、腹を決めて見学に切り替える。十二、十三巻は、二ヶ月余を市内外の見学一筋に過ごす。木戸らは本隊と別にこの機会を利用して憲法などの勉強に熱中したらしい。

第十二巻では、冒頭二月二十五日「パテントオヒス褒巧院」（特許局）を訪れ、多様広大な展示に一驚、アメリカの二大発明として蒸気船と電気をあげている。三月十三日マウントヴァーノンまでポトマック川を巡航し、ジョージ・ワシントン旧宅・墓を訪れ「庭樹知人去尽　春来還発旧時花」と、久しぶりの久米節。三月十六日夜「司天台」（海軍天文台）訪問、木星、水星などを眺める。翌日「ソルジュリー」（財務省）訪問、紙幣製造局など見学。三月二十日　海軍局船廠訪問、南北戦争以後軍艦売却したため、装甲艦が意外に少ない。

第十三巻は、三月二十三日「郵便院」（現在は米国郵便公社）訪問、デッドレター、郵便の歴史、米国の郵便制度など。外国便も盛んであり、「日本ノ人ハ、西洋ヲ想像スル、浮槎星漢ノ如シ、西洋ノ商人は、世界ヲ視ルコト、一都府ノ如シ、如盛ナラスヤ」と結んでいる。同日「勧農寮」（現在の農務省農業研究局（USDA-ARS））訪問し、その記述に五頁余を費やしている。「農事ヲ勧奨スルニハ、理上ト実験ト互ニ備リ」云々、また、「米国ハ、諸業ミナ振興スルト雖トモ、其重ナル利益ハ農業ノ産物ニアリ」、「米国ハ、欧州人民ノ開墾地ナリ」、そして、米国農業発展の理由は、指導者が「自主ノ精神、他ニ優レ実用ノ学術ヲ教ヘタル功ナリ」と結論している。三月二十七日汽車でアナポリスの海軍兵学校訪問。パーティー、ダンスに触発されてか、ここで男女間風習論を説く。四月二十四日、アーリントン墓地での南北戦争の招魂祭参列、ここで「白木の墓表、累々トシテ野ニ満チタリ」などと、南北軍の激戦あったように書かれているが、これは久米の誤り。

（文責）小林 富士雄

英訳実記を読む会報告

担当幹事　岩崎洋三
Tel &Fax 03-3488-0532
iwasaki-yz@jcom.home.ne.jp

■第九十三回

六月十六日、出席者六名。Ch. 72「南ドイツの記」を読む。

南ゲルマンはライン同盟として、北ゲルマン、オーストリア・ゲルマンと三者鼎立の関係にあり、ナポレオンなどフランス歴史とも関

係深い。やがては封建国家や都市国家を連合して勃興した北ゲルマンのプロシャを中心として、統一国家連合へと発展した地域である。

久米たちは列車で北ゲルマンのフランクフルトから、ミュンヘンまで南下する。この章では、途中通過する南ゲルマンの大小の王公国について、国の成立、地勢、国勢、通貨制度、新教の普及など概要が紹介される。市内の見物は二泊したミュンヘンだけである。

代表的産業としてビール・ホップ・ワイン・菜種油、麻・鋳銅・ガラス製品の生産、その他林業管理のあり方についてコメントがある。各国の機械力の普及度の評価として、エンジン一馬力あたりの労働人口で比較しているのは面白い。

久米の記述には、所々で方位、時代、歴史事実などに誤りが見られるが、英訳では新しい訳注が二十九項目追加されていて、丁寧な英訳となっている。

一行はチロルを経てイタリアへ進む。

（文責）小林　養丈

■第九十四回

七月二十一日開催。

Ch. 73 A General Survey of the Country of Italy, Vol. 4 pp. 247-267

使節団一行は一八七三年五月七日の夜にミュンヘンを汽車で発ち、五月九日の朝の三時にフィレンツェに到着している。

この七十三章ではフィレンツェまでの道中記とイタリア国の総説を記述している。その中で、中国の地理書「瀛環志略（えいかんしりゃく）」から引用してイタリアの地理を分かり易く説明している。この英文実記の注に瀛環志略の解説が書いてあるので、その英訳の一部をここに記す。

瀛環志略（えいかんしりゃく）は一八四八年に出版された中国の地理学書である。徐継畬（じょけいよ、Xu Jiyu、）がアモイに滞在中に、英国人、アメリカ人、その他の外国人から得た地図とかその他の地理学の情報にもとづき、まとめた地理学書である。日本にこの本の写し（複製）が輸入された。また、徳島の藩校は一八六一年にイノウエ　シュンヨウ（井上　春洋）が日本人読者向けに句読点と語句注釈をつけた版を発行している。また、このすぐ後に大阪と江戸で販売用に複製が出版された。このテキストは多くの藩校の授業課目で使用され、一八六〇年代に西洋の知識を得るのに大いに役立った。

（文責）小坂田　國雄

歴史部会報告

担当幹事　小野 博正

mi040031-9697@tba.t-com.ne.jp

『山県有朋とその時代』（講師：永冨邦雄氏）

山県が明治国家において、徴兵制による「強兵」を確立し、それが次第に軍国主義を生み、昭和になって陸軍の暴走があって、日本は敗戦を経験した。歴史学者の多くは、軍国主義の父として、戦争責任を山県に押し付けてきた。山県は本当に悪人だったのか。

長州の足軽以下の家に生まれ、四歳で母を失い、祖母の愛と教育を受けた有朋は、その祖母の自殺で、ある種のトラウマに陥る。和歌に長じた父親に学び、彼も和歌を能くしたが、ショックで歌が作れなくなった時代がある。彼は、槍の稽古に励み、そのお陰で志士たちと行動を共にするようになり、吉田松陰の門下となり、それがきっかけで奇兵隊の幹部となり、長州戦争や戊辰戦争で活躍する。明治になって山県は欧米を視察し、奇兵隊時代の経験とも重ね合わせて、徴兵で士族に頼らない軍隊を作ることに邁進した。そして陸軍大輔、初代陸軍卿となり陸軍のボスとして君臨する。

然し、彼が日清・日露戦争を率先したことはない。第三代の首相となると、徴兵制による軍隊と共に、近代的官僚制と、地方制度の生みの親となり、第一回の総選挙と国会を成功裡に主宰し、外交でも用心深くしたたかな手腕を発揮した。第二次山県内閣では、義和団事件で、見事な対応をなし世界の信頼を得た。国内でも、文官任用令などで、官界の中立性を図った。藩閥の権化という非難も、必ずしも当たらない。

山県は統帥権の欠陥も気付いていたと思う。かつては、戦争を始める前に、終わりを想定していた。元老が生きているうちは、統帥権も正しく機能したろうが、二代目から駄目になった。山県が生きていたら、逆に軍部の暴走はなかったろう。

勿論、山県にも欠点は多い。山城屋和助事件の軍予算流用や椿山荘、無鄰庵などの蓄財の傾向はあった。だが、草庵での庭造りは彼の趣味でもあり、西洋式近代日本の庭園のスタートを作ったともいえる。山県有朋は、生涯、国を憂えた。西郷隆盛にも愛され、そして西郷を尊敬した愛国者でもあった。最近、山県を見直す学者も多い。

（文責）小野　博正

関西支部報告

担当幹事　難波 康熙

namba@jttk.zaq.ne.jp

■第五十五回

七月二十三日開催、出席者七名。

輪読は第二巻・第二十五章、倫敦府の記百三頁から。

この章では、英国の郵便、電信のシステムと制度に非常に関心を持ち多くの注意深く観察し詳細に記述している。例えば郵便物の配達不能率が一・五／一万という極端な低さ、郵便事業採算の黒字内容などを詳細に記述している。（それは日本でも丁度前年から「新式郵便」の制度を発足させたばかりであったため関心が高かったのではと推定される。因みに東京―大阪で三日六時間かかり、料金は一貫五百文と英国に比してもかなりの高額だったようだ。

英国歴代王の歴史を物語る施設や遺品などの見学の記述に関連して、会員の加納氏から英国王の家系図の資料が提出された。英国は欧州大陸から近いため、王朝の変遷や国王の家系図にも欧州大陸からの重なる侵略と支配があったことが影響していることを理解した。

（文責）難波　康熙

特定非営利活動法人
「米欧亜回覧の会」ご案内

趣　旨　この会は「岩倉使節団」に興味をもち、その記録である「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。
この歴史的な大いなる旅と「実記」は、まさに「温故知新」の宝庫といえましょう。
この素材を媒体に歴史を学び、現代の直面する諸問題についても自由に語り合う会です。

会　員　趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例　会　年に4回、全体例会があります。

部　会　テーマ別に読む会、歴史、現未来部会等があり、映像サロン・旅行会・研究会・シンポジウムなどを行っています。

機関紙　年に4回、機関紙を発行し活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

役　員　理事長（泉三郎）他理事および監事で構成、会員の中から幹事十数名を選び、運営を担当します。

会　費　年会費6,000円とし、主として通信費及び機関紙代に充当します。例会・部会・講演会などについては、その都度の会費とします。なお、遠隔地居住者、学生、仮入会希望者には地方会員、準会員、学生会員の制度もあります。

事務局　「米欧亜回覧の会」
〒135-0021
東京都江東区白河 4-9-14-1407
E-mail:info@iwakura-mission.gr.jp
TEL:080-6612-1101　FAX:03-3641-9407

入会申込

入会申込書は事務局にあります。新規入会に際しては入会金5, 000円を頂きます。
なお年会費などのお支払は郵便振込が便利です。
00180-2-580729　特定非営利活動法人米欧亜回覧の会

ホームページ

メッセージ・活動と内容・岩倉使節団・米欧回覧実記・会員のページ 等
また、書籍・ＤＶＤ案内もあります
http//www.iwakura-mission.jp
＊お知らせ欄も時々チェックしてください

＜催し案内＞

2011年10月～12月の予定です

☆全体例会

日　時：11月 5日（土）　13:30～17:00
（第１部）全体例会（会務報告）　13：30～14:15
（第２部）パネルディスカッション 14：30～17:00
テーマ：岩倉使節団は
明治国家に何をもたらしたのか
コーディネーター：泉三郎氏
パネラー：山田哲司氏、芳野健二氏、大平忠氏、
永富邦雄氏、小野寺満憲氏、小野博正氏
場　所：国際文化会館講堂
会　費：2,000円、学生1,000円
＊例会終了後「新入会員歓迎懇親会」を開催します。ここ数年に入会された方を中心に、当日のパネラーや幹事・有志の皆様で懇親会を開きますので是非ご出席ください。
会　費：5,000円　「楓林」17:15～19:00

☆実記を読む会

日　時：10月13日（木）　14:30～17:00
11月10日（木）　14:30～17:00
12月 8日（木）　14:30～17:00
忘年会を予定　17：30～
場　所：国際文化会館Cルーム（会費：1,000円）

☆英訳実記を読む会

日　時：10月20日（木）　18:30～21:00
11月17日（木）　18:30～21:00
12月15日（木）　18:30～21:00
場　所：国際文化会館 402室（会費：1,000円）

☆歴史部会

日　時：10月17日（月）　18:00～21:00
「フルベッキ」（岩崎洋三氏）
11月21日（月）　18:00～21:00
「岩倉具視」（山田哲司氏）
場　所：国際文化会館（会費：1,000円）

☆関西支部例会

日　時：10月22日（土）　13:00～16:30
場　所：大阪弥生会館　(06-6373-1841)
会　費：1,500円＋昼食懇談会1,000円（12:30～）

編集後記

◇設立十五周年記念「小論集」の呼びかけに応じた会員の小論文の初稿がいくつか編集委員に届くようになりました。A四・十枚というボリュームにも関わらず、節電の夏休みに書き上げた会員の熱意が伝わってきます。現在、執筆中の会員も多いことを考えると、懸案の課題である会の活性化に向けて、少し動き始めたように思います。
◇集まった原稿はホームページ「会員のページ」に掲載することになり、同時に、会の旅行文集や記録なども加えたデジタル・アーカイブ化を試みるなど、活動の連鎖がみられます。また、ホームページの容量倍増の契約変更に併せて、会のメール送受信やメーリングリスト追加などの事務局体制も遅ればせながら整いつつあります。
◇恒例の十月例会は、十一月五日開催となりました。今回は、岩倉使節団と留守政府の合計六名それぞれの担当となった会員によるパネルディスカッションという、ゲスト講演とは一味違った趣向です。ご期待ください。また、例会終了後には、久しぶりに新入会員歓迎の懇親会を予定しています。各部会から多数の参加をお願いいたします。（N）